

くらし

ミツバチを飼いたい

②

台風が迫り空がぐずついている。この日体験したのは給餌だ。

た9月5日。秋田屋本店(岐阜市)の後藤真人養蜂部長(65)と山川孝行副部長(58)とともに山あいの岐阜県山県市へ向かった。山道の突き当たりで車が止まると林の間に膝丈ほどの高さの巣箱が並んでいた。ここが「蜂場(ほうじょう)」だ。約100箱の巣箱を置くが、蜜を集めるのが目的ではなく、養蜂家に販売する働き蜂の群れや女王蜂を飼育している。いわば「蜂の在庫品」の倉庫だ。養蜂家の一部はこうした種蜂販売業者から蜂を買い、レンゲなどの花が咲き、たくさん蜜のある場所に向かっ

学・験・体

て全国を移動する。蜂場周辺には夏場、ハギやカラスザンシヨウなどの野草の花が咲くが、飼育中のハチの腹を満たすには足りない。そこで人間が濃い砂糖水を一缶(18㍉入り)から巣箱の中の器に注いで補う。山川さんが次々に巣箱の蓋を開け、器材を使い煙を蜂にかける。煙を浴びて蜂が少し弱った間に砂糖水を注ぐ手順だ。だが、慣れずともたまたましている間に蜂は元気を取り戻す。砂糖水の重い缶を抱える私の周囲には何匹もの蜂がブーンという音を立てて勢いよく舞う。餌を与え



作業に臨む記者。面布、ゴム手袋を着けたが刺された(岐阜県山県市)

「蜂場」でエサの砂糖水やり

ご機嫌斜め、尻と脚にチクリ

ているはずなのに機嫌が悪い。「雨上がりに巣箱の蓋を開けると、蜂はぬれるのが嫌で怒る」(山川さん)らしい。やがて尻と膝の裏側がチクリとした。服の上から刺されたので腫れは小さかったが、汗をかきながら作業を終える。酵素でおいしいハチミツを作り出すのだ。「花咲く季節のハチミツはもっとおいしいですよ。ぜひ賞味したいと思った。」この日、後藤さんと山川さんは虫取り網をさっと振るなど奇妙な行動に出た。巣箱に寄ってくるスズメバチを捕まえるためだ。捕まえた蜂を足で軽く踏み、粘着シート上に置く。「生きた蜂を置いておくと、フェロモンを出して仲間を呼ぶんです」。たちまち別のスズメバチが飛んできてシートに捕まった。スズメバチを駆除するのは、ミツバチの生命を脅かす最大の敵だからだ。後藤さんは「この夏は2箱全滅しました。見回りを怠ると巣に入り込み、ミツバチをすべて殺し蜜を奪う」と顔をしかめた。入り口で無数のミツバチがス

一言 ニホンミツバチはスズメバチが襲来すると大勢で取り囲んで殺すが、セイヨウミツバチにはこの習性がない。